

平成 17 年度企画展 重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

陶磁器から古の神事を考える

いにしえ
(祭祀・儀式)

— 首里城京の内神事における陶磁器使用の在り方 —



開催期間：平成 18 年 1 月 17 日 (火) ~ 1 月 22 日 (日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

目 次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
陶磁器から古の神事（祭祀・儀式）を考える — 首里城京の内神事における陶磁器使用の在り方 —	
◎ 首里城「京の内」跡とは ・・・・・・・・・・・・・・・・	2
◎ 重要文化財指定基準 ・・・・・・・・・・・・・・・・	3
◎ 重要文化財指定の名称と指定理由 ・・・・・・・・	4
◎ 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧 ・・・・・・・・	5
◎ 展示品紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・	6
◎ 首里城京の内関連年表 ・・・・・・・・・・・・・・・・	18
◎ 用語解説 ・・・・・・・・・・・・・・・・	20
1. 京の内の陶磁器から想像した国王即位の様子 ・・・・・・・・	22
2. 儀式用の祭具としてみた京の内の金属製品・ガラス玉 ・・・・・・・・	27

凡 例

1. 本書は、2006（平成18）年1月17日（火）から1月22日（日）まで開催する「重要文化財『首里城京の内跡出土品展』」の展示を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 本企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催している。
3. 本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。

ごあいさつ

陶磁器から古の神事（祭祀・儀式）を考える

— 首里城京の内神事における陶磁器使用の在り方 —

平成 12 年に国指定の重要文化財となった首里城京の内跡出土の陶磁器および金属製品・ガラス玉などを、聖域である「京の内」由来ということから、神聖な祭事などで使用された祭祀遺物として捉え、今回の展示を企画しました。

ここでは、往時の京の内の拝所（御嶽）前における重要な神事の状況を陶磁器の配置や組み合わせなどから想像し、復元を試みました。

これにより、見慣れた日用雑器である碗・皿・瓶^{びん}などが、神々やご先祖への供物や神酒を納めた聖なる器として利用されたり、あるいは大きな花瓶や壺などは、神々やご先祖の威厳と威信を示す聖器として用いられたと感じ取ることができるでしょう。

このような視点から陶磁器を考えてみると、日用品あるいは美術品としての固定化された概念から脱却し、新たな発想や視点でもって往時の精神文化を感じ取り、ひいては時代背景を思い描くことができるかも知れません。

今回の企画展をとおして、新たな視点で沖縄の歴史や文化に関心を高め、理解を深めていただきたいと思います。

平成 18 年 1 月 17 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場 清志

首里城「京の内」跡とは

首里城京の内跡は、正殿、南殿、北殿、奉神門などの政事（政治）を行う建物が集中する区画の南西地区に位置し、面積は約 5,000 m²と考えられています。

「京の内」の「京」は、“靈力（セジ、シジ）”と同義語であり、その他にも神が降臨もしくは来訪する岩山や小島（南城市斎場御嶽の大岩を“キヨウノハナ”、また、名護市嘉陽集落の東海上にある小島を“きょう”とも称す）等の名称から、首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」と理解されると共に「靈力のある聖域」と解されます。

さらに「京の内」には、絵図や文献などから沖縄の開闢二神降臨の御嶽（拝所）とされる、「首里森御嶽」・「真玉森御嶽」の二つの御嶽以外に、「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽が存在したようです。

重要文化財指定を受けた資料は、沖縄県教育委員会が実施した 1994 年から 1997 年にかけての復元整備事業に伴う発掘調査で、京の内南西地点から発見されたものです。火熱を受けた状態で中国陶磁器をはじめとする多くの陶磁器類が一括して発見されたもので、文献などから、倉庫跡（3m × 4m）と考えられています。

出土した陶磁器の年代からみて、倉庫が焼け落ちたのは 15 世紀の中頃と考えられています。



● 1459 年失火の倉庫跡

首里城の図

重要文化財指定基準

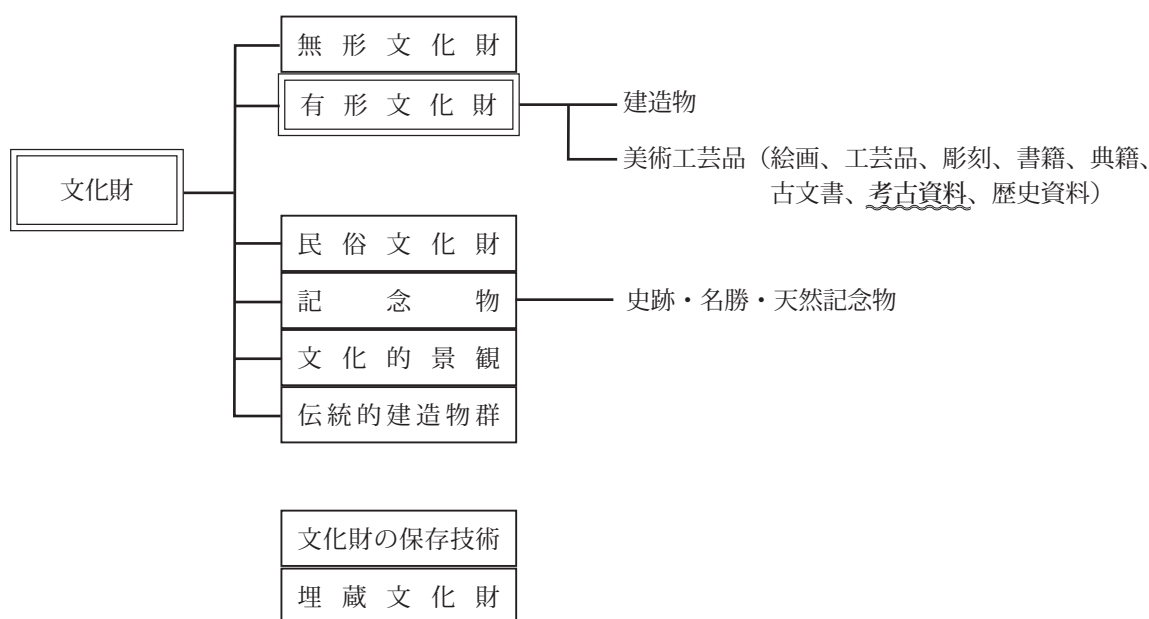
◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角^が牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸^{たく}、銅劍、銅鉾^{ほこ}その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙^が・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)
〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

◎ 文化財の種類 (平成17年4月1日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた)



・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定答申を受けたことになります。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所有者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（庁保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説明文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した^{しゅりむいとうたき}首里森御嶽は琉球王国の最高神女である^{きこえおおきみ}聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」（訳文の趣旨）とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鏝等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋）

※ 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※ 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

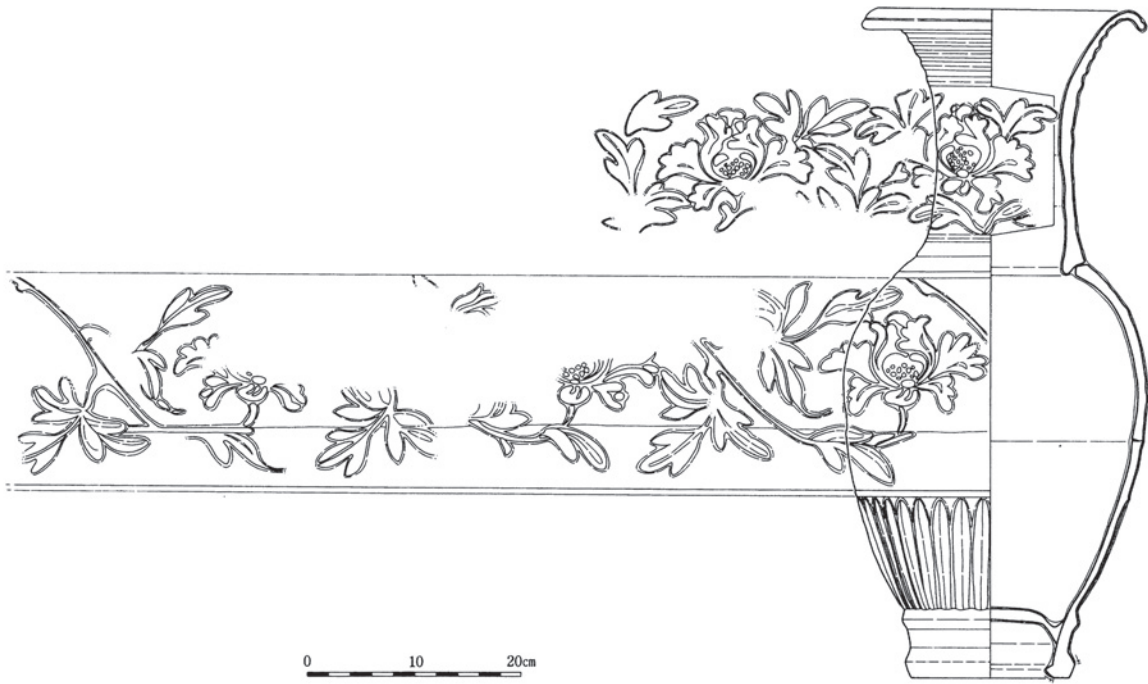
重要文化財 考古資料の部	
指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器	518点
附 ^{つけたり} 一、金属製品	一括
附 ^{つけたり} 一、ガラス玉	一括

重要文化財 陶磁器内訳

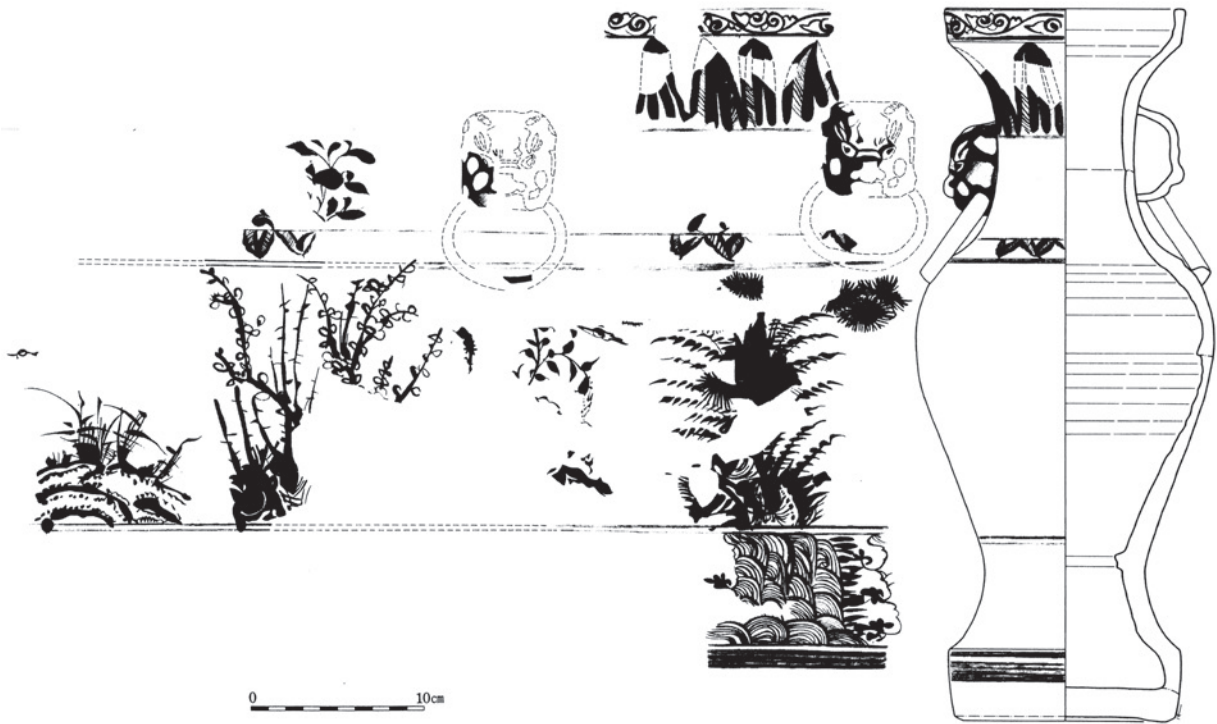
種類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁 (289点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	花瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白磁 (33点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵 (3点)	碗 2	皿 1	
紅釉 (1点)	水注 1		
瑠璃釉 (2点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1点)	碗 1		
褐釉陶器 (35点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6点)	すりばち 1	かめ 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5点)	蓋 5		
合計		518点	



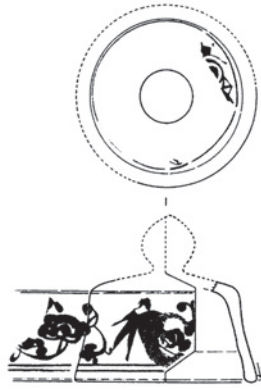
展 示 品 紹 介



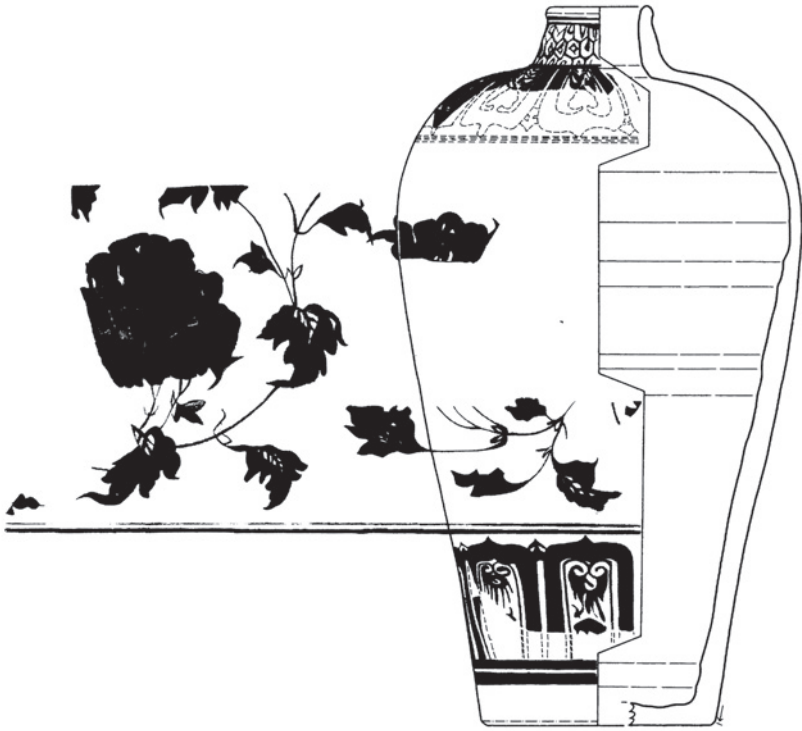
せいじ ぼたんからくさもんおお かびん
 青磁牡丹唐草文大花瓶 (15 世紀前半：明初期)



せい かまつうめじゅもんそうじ かびん
 青花松梅樹文双耳花瓶 (15 世紀前半：明初期)

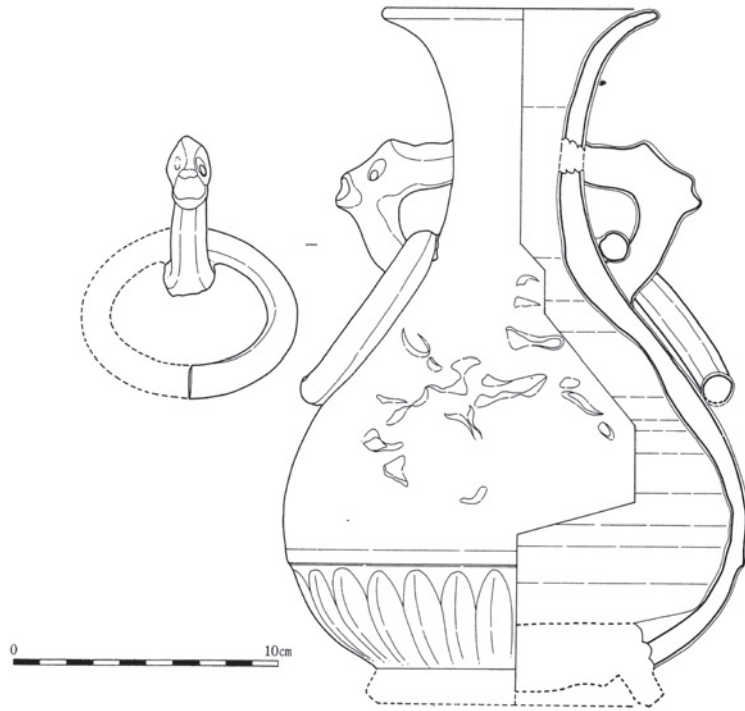


せい か ぼ たんからくさもんめいびん
 青花牡丹唐草文梅瓶
 (15 世紀前半：明初期)

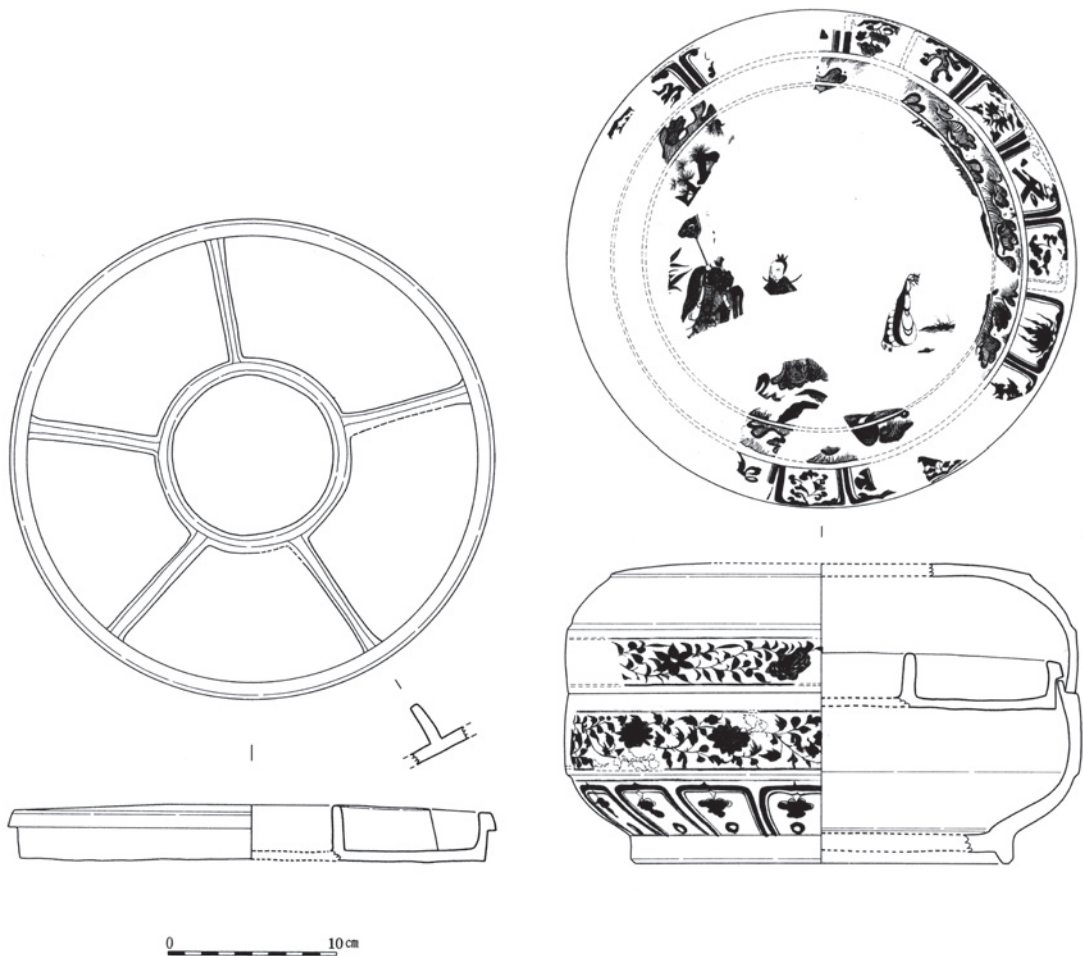


みんせい か ぼ たんからくさもんめいびん
 明青花牡丹唐草文梅瓶 (15 世紀：明初期)

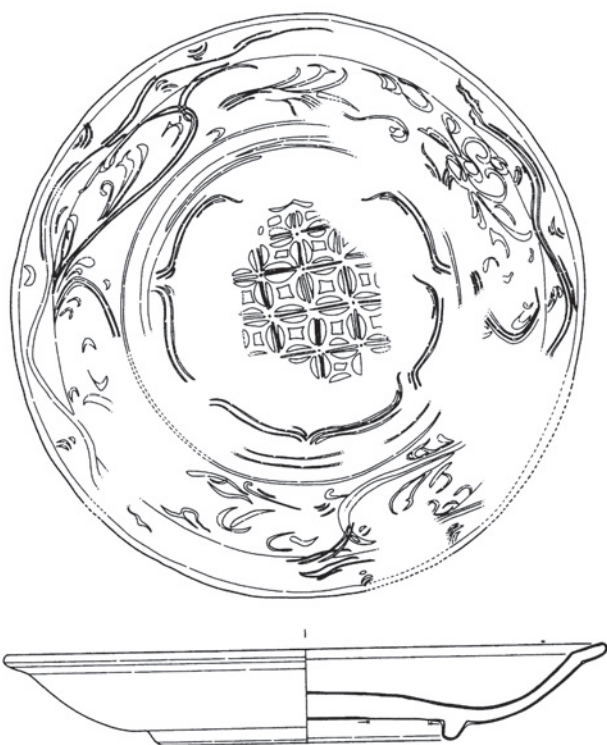
0 10cm



せいじそうじびん
青磁双耳瓶 (15 世紀：明初期)



げんせい か はつぼうもんおおごうす
元青花八宝文大合子 (14 世紀：元末期)



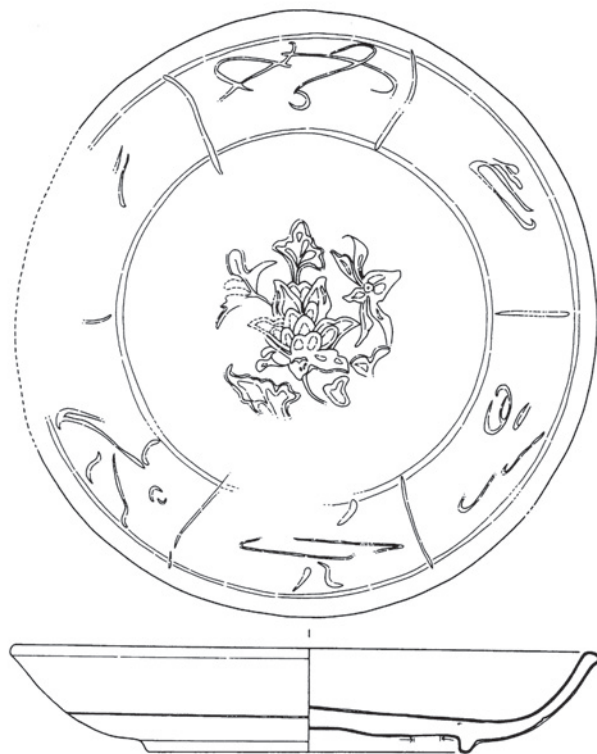
せいじつばぶちばん
青磁鐔縁盤 (15世紀前半：明初期)



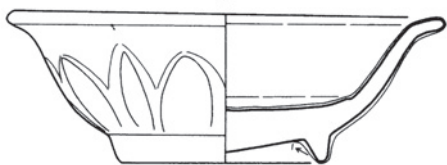
せいじちよつこうこうえんばん
青磁直口口縁盤 (15世紀：明初期)



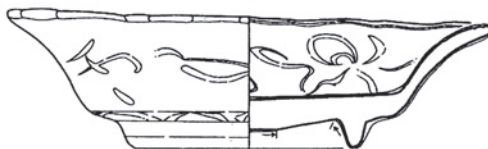
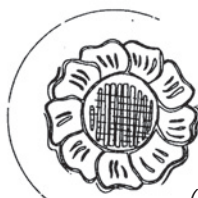
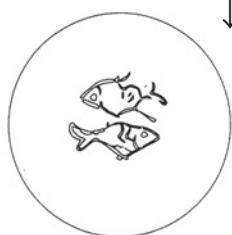
0 10cm



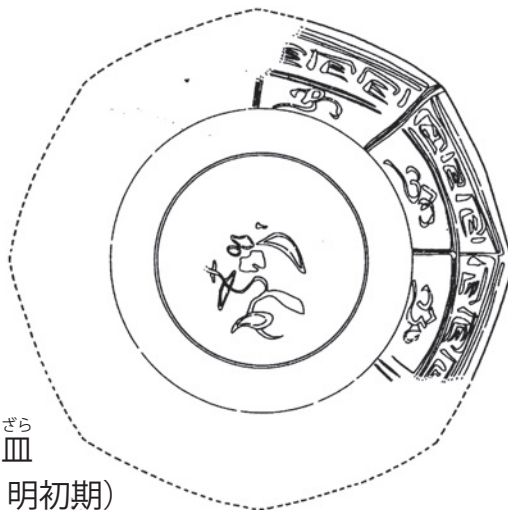
0 10cm



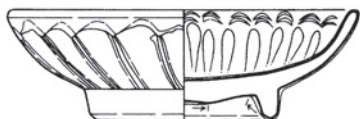
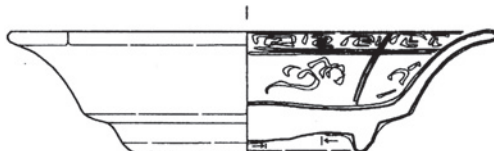
せいじいんかそうぎよもんざら
青磁印花双魚文皿 (15世紀前半：明初期)



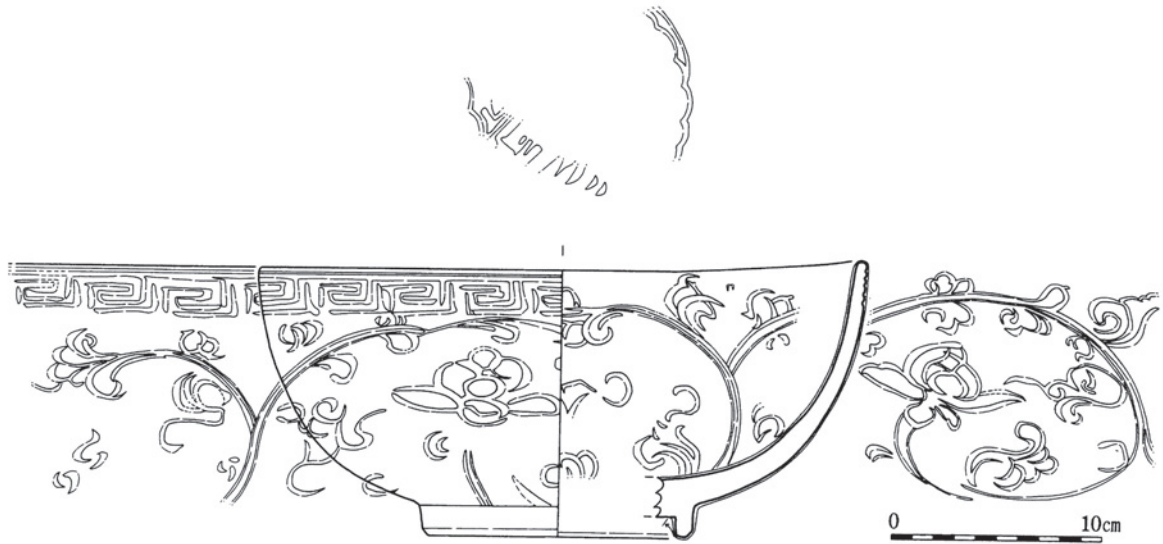
せいじりょうかざら
青磁稜花皿
(15世紀前半：明初期)



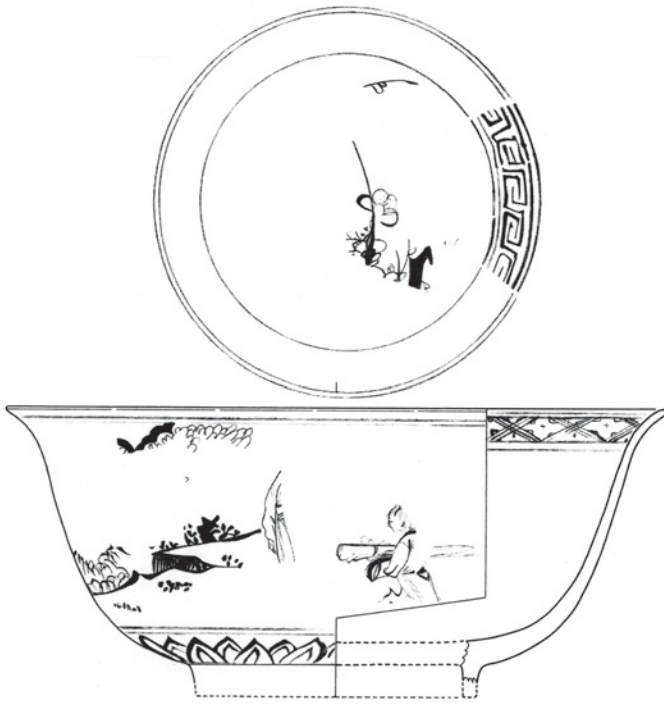
せいじはつかくざら
青磁八角皿
(15世紀前半：明初期)



せいじゆうもんちよつこうえんざら
青磁有文直口口縁皿 (15世紀：明初期)



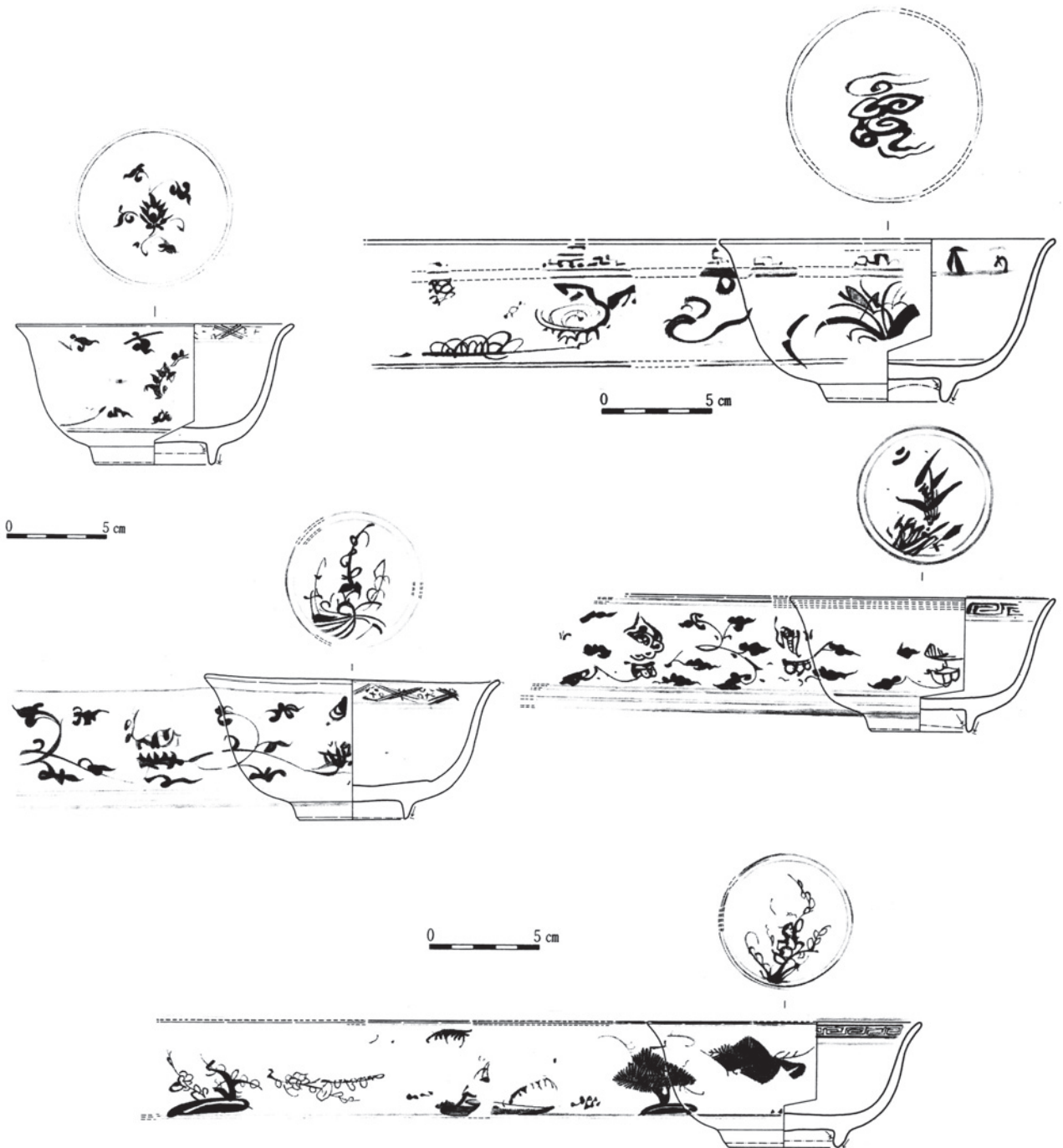
せいじからくさもんおおはち
青磁唐草文大鉢 (15世紀：明初期)



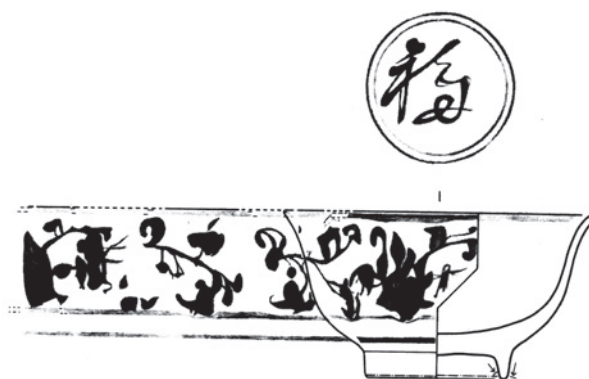
せいかうんどうもんおおはち
青花雲堂手文大鉢 (15世紀前半：明初期)



せいかきりんもんざら
青花麒麟文皿 (15世紀前半：明初期)

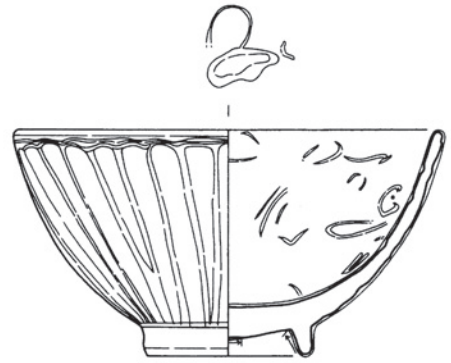


みんせいかわん
明青花碗 (15 世紀前半：明初期)

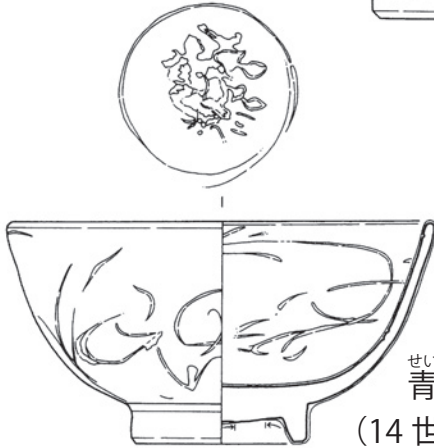


せい か ぼたんからくさもん ふく じめいわん
青花牡丹唐草文「福」字銘碗 (15 世紀前半：明初期)

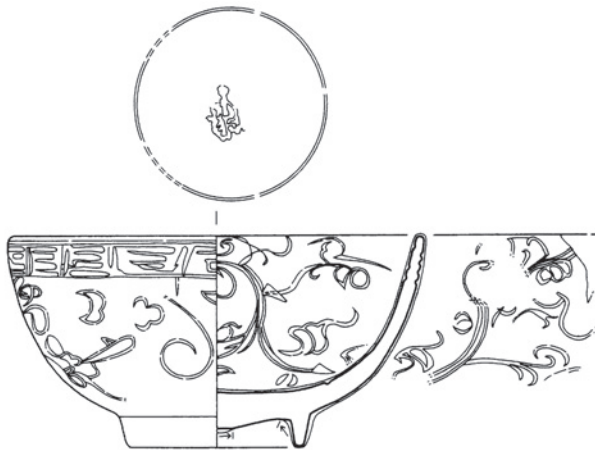
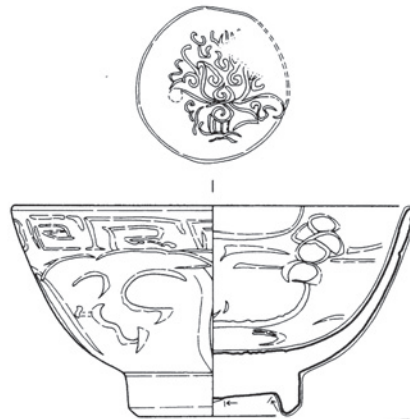
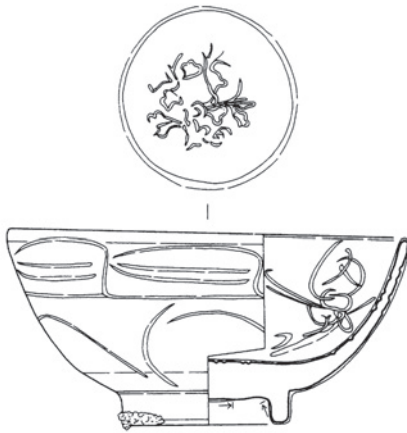
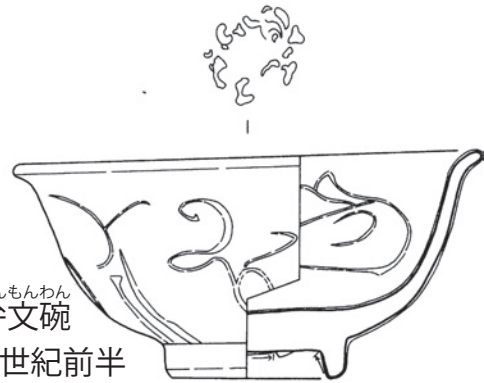
せいじ れんべんもんわん
青磁蓮弁文碗
(14世紀後半～15世紀中頃
：明初期)



せいじ せんごくさいれんべんもんわん
青磁線刻細蓮弁文碗
(15世紀：明初期)

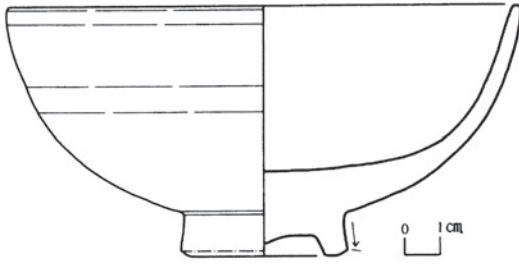


せいじ しきれんべんもんわん
青磁ラマ式蓮弁文碗
(14世紀後半～15世紀前半
：明初期)

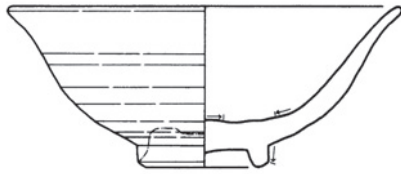
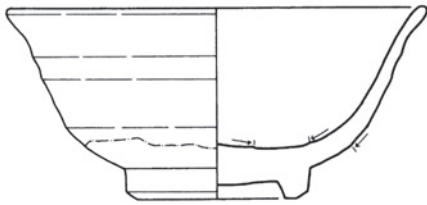


0 10cm

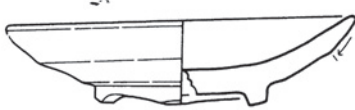
せいじ らいもんたいわん
青磁雷文帯碗 (14世紀後半～15世紀：明初期)



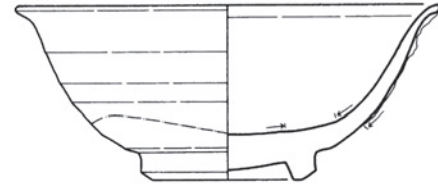
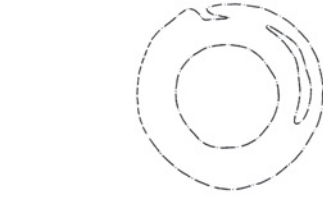
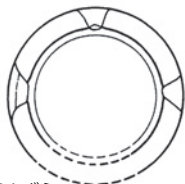
はくじ ないわんこうえんわん
白磁内彎口縁碗 (15 世紀：明初期)



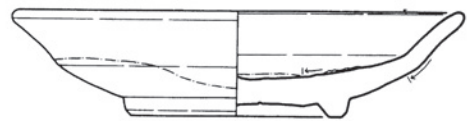
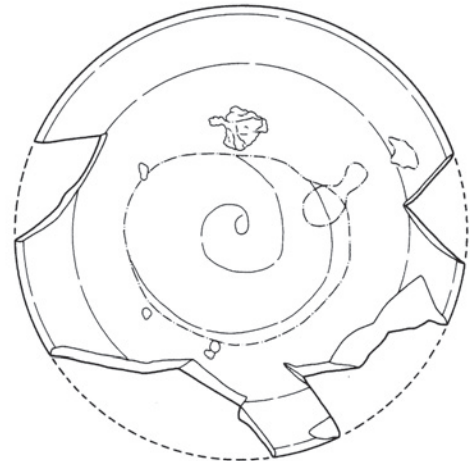
はくじ がいはんこうえんはい
白磁外反口縁杯 (15 世紀前半：明初期)



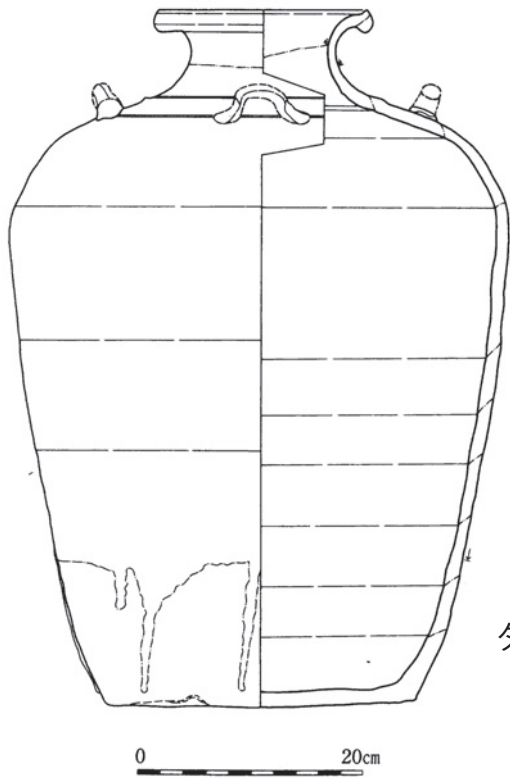
はくじ ちよつこうこうえんざら
白磁直口口縁皿 (15 世紀前半：明初期)



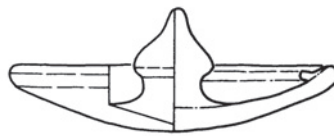
はくじ がいはんこうえんわん
白磁外反口縁碗 (15 世紀後半：明初期)



はくじ がいはんこうえんざら
白磁外反口縁皿 (15 世紀前半：明初期)

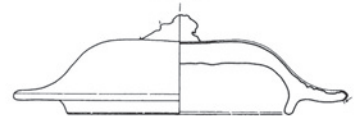


0 10cm

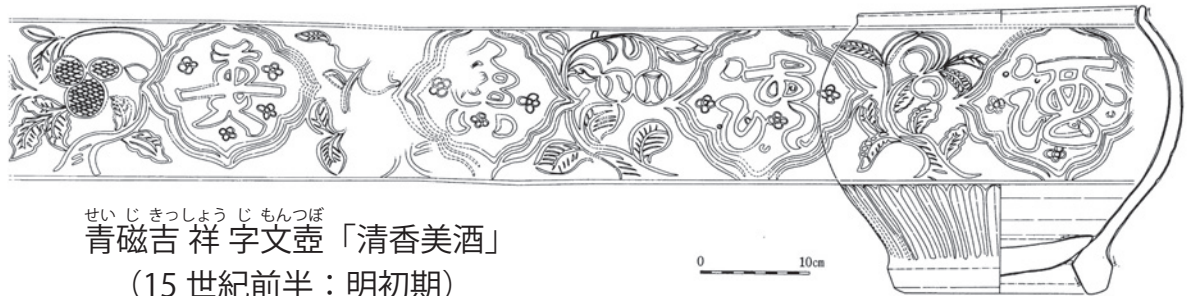


さんはんねらどき ふた
タイ産半練土器 蓋

さんかつゆとうき つぼ
タイ産褐釉陶器 壺



0 20cm



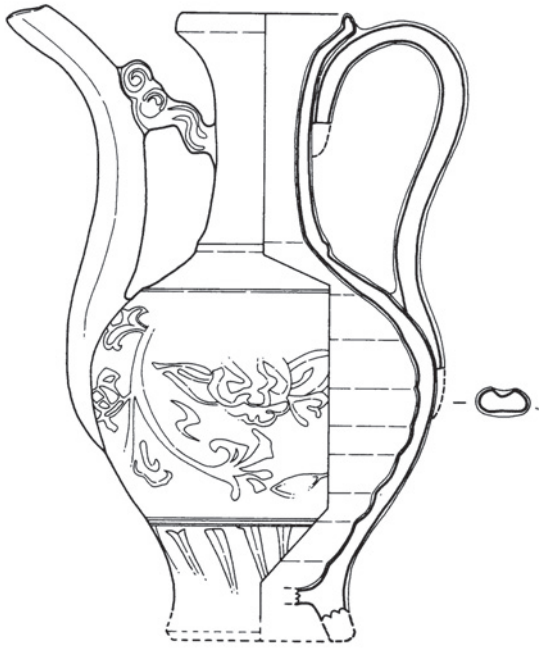
せいじきしょうじもんつぼ
青磁吉祥字文壺「清香美酒」
(15世紀前半：明初期)

0 10cm

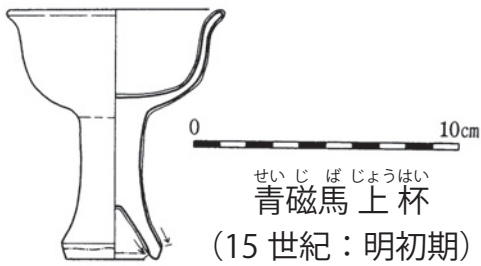


0 10cm

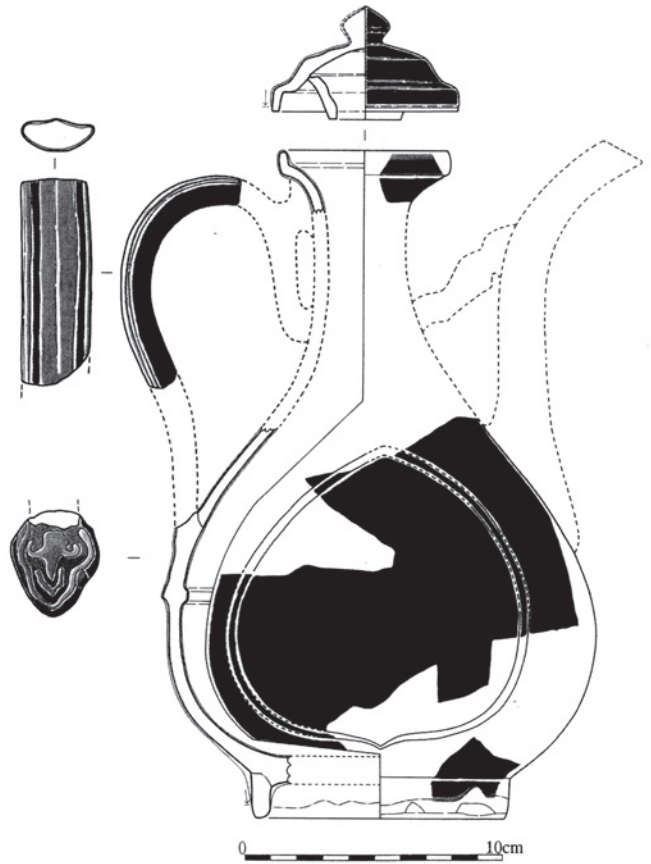
せいかぼたんからくさもんつぼ
青花牡丹唐草文壺 (15世紀前半：明初期)



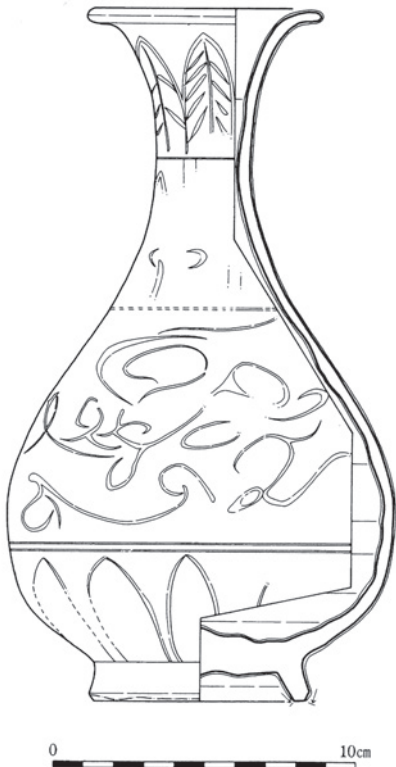
せいじ ぼたんからくさもんすいちゆう
青磁牡丹唐草文水注 (15 世紀前半：明初期)



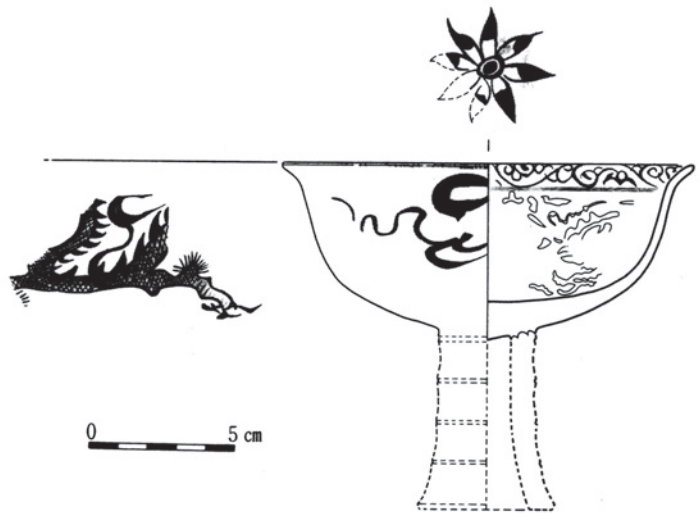
せいじ ぼじょうはい
青磁馬上杯
(15 世紀：明初期)



こうゆすいちゆう
紅釉水注 (14 世紀：元末期)

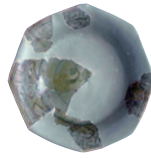


せいじぎよくこしゆんびん
青磁玉壺春瓶 (15 世紀：明初期)



せいかりゅうもんこうそくはい
青花龍文高足杯 (14 世紀後半：元末期)

明 氏 尚 一 第 氏 尚 二 第



青磁雷文帯八角皿 (中国)



青磁牡丹唐草文水注 (中国)



青花牡丹唐草文梅瓶 (中国)



青花花唐草文面取瓶 (ベトナム)



青磁双耳唐草文瓶 (中国)



青磁馬上杯 (中国)



青磁口折印花双魚文皿 (中国)



備前焼壺 (日本)



褐釉陶器四耳壺 (タイ)



青磁雷文帯碗 (中国)



青花松梅樹文双耳花瓶 (中国)

一四二〇 尚思紹、シヤムに使を遣わす

一四二二 バレンバン(インドネシア)との交渉はじまる

一四二七 龍潭を掘り安国山を築く

一四二九 尚巴志、三山統一

一四五三 志魯・布里の乱が起こり、首里城炎上

一 五彩の手法が中国・民窯で盛んになる

一四五八 万国津梁の鐘鑄造

一四五九 首里城京の内倉庫が炎上

一四六三 マラッカへ使者を派遣

一四七〇 金丸(尚田)即位

〈第二尚氏王統始まる〉

一四七七 首里城歓会門、久慶門の創建

一四九〇 パタニ(タイ)と始めて交易

一 この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める

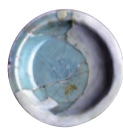
一五〇一 玉陵を築く

一五〇八 首里城北殿の創建

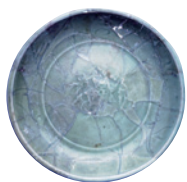
一五二九 首里城守礼門の創建

一五七〇 南方貿易の記録途絶える

元		南宋	中国
英 祖 王 統		舜天王統	琉球



青磁口折蓮弁文皿(中国)



青磁牡丹唐草文盤(中国)



青花八宝文大合子(中国)



青磁口折蓮弁文皿(中国)



青磁吉祥字文壺(中国)



紅釉水注(中国)



青磁牡丹唐草文大花瓶(中国)



青磁蓮弁文壺(中国)



青花龍文高足杯(中国)



青花牡丹唐草文壺(中国)



五彩菊花文碗(中国)

京の内の遺物

中国・沖縄の主な流れ

- 一四〇七 隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣
- 一四〇七 南宋から元にかけて陶磁器の輸出がめざましくなる
- 一四〇七 中国江西省・景德鎮の台頭
- 一四〇七 この頃、景德鎮で青花(染付)磁器が完成する
- 一四〇七 この頃、景德鎮で五彩色絵が創作される
- 一三三〇 察度、浦添按司から中山王となり首里へ
- 一三二二 明が興る
- 一三二二 中山王察度、はじめて明に進貢
- 一三二二 山南王承察度、明に進貢
- 一三二二 山北王怕尼芝、明に進貢
- 一三二二 明の太祖、中山・南山両王に海船贈与
- 一三二二 察度、朝鮮(高麗)と通好する
- 一三二二 閩人三六姓、渡来と伝わる
- 一四〇四 冊封使、はじめて来琉
- 一四〇四 シヤム(タイ)船渡来し交易
- 一四〇六 尚巴志、武寧王を討ち父・思紹を王にたてる
- 一四〇六 <察度王統滅亡、第一尚氏興る>
- 一四一六 尚巴志、山北王攀安知を討つ

用語解説

首里城（しゅりじょう）

県内最大のグスクで、伝承によると14世紀頃に察度^{さつと}が築城^{りゅうきゅうじょう}し、琉球^{りゅうきゅう}処^{しよ}分^{ぶん}（1879年）までの約500年間琉球王国^{りゅうきゅうおうこく}の王宮として機能した。標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に位置し、グスクの規模は、東西370m、南北213m、面積46.167㎡。首里城は、大きく外郭^{がいかく}と内郭^{ないかく}で構成され、外郭には歓会門^{かんかいもん}、久慶門^{きゅうけいもん}、木曳門^{こひきもん}、継世門^{けいせいもん}を開く、内郭には瑞泉門^{ずいせんもん}、漏刻門^{ろうこくもん}、右掖門^{うえきもん}、淑順門^{しゅくじゆんもん}、白銀門^{はくぎんもん}、美福門^{みふくもん}などを設け、正殿^{せいでん}、南殿^{なんでん}、北殿^{ほくでん}などの木造瓦葺きの諸宮殿など政治の中核的な施設を建立した。正殿跡の遺構確認調査（基壇^{きだん}は、第Ⅰ期から第Ⅴ期までが重複）で第Ⅰ期基壇は、14世紀代に位置づけられている。

京の内（きょうのうち）

「京の内」は、首里城内郭の南西側に位置し、城内で最も神聖な空間。「京の内」は『おもろさうし』に「きやのうち」、「けあのうち」、「けよのうち」と表記されている。語義として、「けあ」は「セジ」（灵力）の同義語として考えられ、“神”または“神の灵力”の意味を持つ。また、民俗学では、神が降臨する大岩の頂上や岩島・小島を「京（きょう）」と称している事例などから、京の内は、神が降臨する“聖なる場所（聖域）”と考えられる。京の内一帯が首里城発祥の地とも言われ、京の内には“首里森御嶽^{しゅりのみうたき}”、“真珠森御嶽^{まごまひのうたき}”の他に“京の内之三御嶽^{きょうのうちのみうたき}”と称された三つの御嶽があった。首里森御嶽は、開闢神阿摩美久^{かいびやくしんあまみく}（アマミキヨ）が造った御嶽とされ、降臨神である天神または陽神“キミテブリ（君手摩）”の神を迎えて琉球王国の即位決定をはじめ国王への託宣^{たくせん}を下すなど、琉球王国の重要な祭祀が執りおこなわれた。

御嶽（うたき）

村落の後背丘陵上にある拝所のことを御嶽と称し、村を愛護する祖霊神、島守神、ニライ・カナイなどと関係する聖域のこと。沖縄諸島では、同義語のムイ、ウガン、グスク、宮古諸島ではスク、八重山諸島ではオン、ワー、スク、などと呼称されてきた。首里城内の御嶽について『琉球国由来記』（1713年編纂）には、九つの御嶽が掲載されている。

青磁（せいじ）

磁器の一種。素地^{そじ}と釉薬^{ゆうやく}の中に含まれる鉄分^{てつぶん}が、還元焰^{かんげんえん}焼成^{しょうせい}によって青く発色した磁器。中国の殷周^{いんしゅう}・戦国時代の灰釉陶器^{かいゆうとうき}がその源流とされ、後漢^{ごかん}・三国時代の浙江省^{さんごく}方面^{せつこうしやう}で製作された古越磁^{こえつじ}が最初の原始的青磁であるとされている。沖縄や日本で出土する青磁の多くは、元から明にかけて浙江省の龍泉窯^{りゅうせんよう}及び、その周辺の窯で製作されたものである。

白磁（はくじ）

磁器の一種。素地^{そじ}の透明釉^{とうめいゆう}を掛け、高温で焼成した磁器。白磁の起源についてはまだ明確にされていないが、その起源は灰釉陶器や古越磁とされる。原始的な白磁が誕生したのは、6～7世紀の隋から初唐とされる。沖縄で出土する白磁には、稀に定窯^{ていよう}で製作されたものがみられるが、大部分は景德鎮窯^{けいとくちんよう}や中国南部の諸窯^{しよよう}および徳化窯^{とくかよう}を産地とする。

磁器（じき）

素地は白色で、半透明^{はんとうめい}で吸水性のない硬い焼き物をさす。陶石^{とうせき}を原料とし、長石^{ちやうせき}・石英などを配合して素地とする。素焼きした後に施釉し、1,100～1,500度の高温で焼成する。中国漢代末に始まったとされ、宋代に完成された。

青花〈染付〉・(せい か)〈そめつけ〉

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般的に青花（青花白磁・釉裏青）と称す。白色の素地にコバルトを含む呉須による絵付けを施したあとに、透明釉をかけて焼成する。還元焰焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でのコバルトの使用は唐代にみられるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋代以降であり、元代に完成する。青花の主な生産地として景德鎮窯および周辺諸窯があげられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯が出現する。また、周辺諸国では中国の影響を受けて、ベトナムでは安南染付が、朝鮮では李朝初期から染付の製作が開始される。

※コバルト・・・呉須などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青（藍）の材料として用いられる。

※呉須・・・コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを極細粉末にして水に溶かし、文様を描いたあとに上から透明釉を掛けて焼き上げると藍色（青色）に発色する。

紅釉（こうゆ）

銅を発色剤に使用し、高火度で焼成された磁器。銅紅釉、辰砂釉とも呼ばれる。還元焰焼成により鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出。景德鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として製作された。

瑠璃釉（るりゆ）

酸化コバルトを長石に混ぜた着色料を使用した釉色。高火度で焼成すると青く発色する。ほぼ全面に施釉した場合に称される。主に磁器に用いられていることが多い。日本や沖縄で出土する瑠璃釉の多くは景德鎮窯および中国南部の徳化窯で生産されたものである。

褐釉（かつゆ）

広い意味では鉄分を呈色剤として褐色になった陶器も含まれるが、陶磁史からみた場合には、中国漢代に栄えた酸化鉄を呈色剤とする低火度鉛釉のことをさし、その陶器を褐釉陶器と称する。沖縄で出土する褐釉陶器は、中国南部の広東省やタイで生産された12世紀以降の資料が多い。

合子（ごうす）

蓋のある小型容器の総称。蓋と身を合わせるの意。盆（子）・合ともいう。多くは扁球形で、素材は陶磁器、漆器、金属器などで、用途には香合、化粧品入れ、薬味入れ、朱肉入れなどがある。元来は蓋物の身を転用したもの。

瓶（びん）

壺・甕類のうち、その最小のものをさす。瓶は元来は水を汲んだり物を炊く道具であった。のちに、陶器の器で口が小さく、胴部の膨らんだ物をいうようになった。徳利や花生けとして使用された。

引用文献・参考文献

- ・『やきもの辞典』 平凡社 1991年
- ・金城亀信・城間 肇『重要文化財 特別企画展 首里城京の内展 ―貿易陶磁からみた大交易時代―』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年
- ・沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年

1. 京の内の陶磁器から想像した国王即位の様子

京の内倉庫跡出土陶磁器から琉球国王即位の儀式を想像してみました。

中国の『明実録』によると、1459年、尚泰久は火災により倉庫を焼失したと報告したことが記載されています。このことから京の内の倉庫が火災に遭ったのは1459年と考えられます。

1454年に即位した尚泰久は、琉球国王として相応しい人物であるかどうかの判断を問う儀式を京の内において行いました。その儀式の様子を陶磁器から想像すると、以下のようになります。

尚泰久の琉球国王としての即位の可否について“首里森御嶽”の降臨神である“キミテズリ（君手摩）”の神をお迎えし、琉球王国最高神女の佐司笠（さすかさ）を中心とした高級神女達が神事をおこないました。

首里森御嶽の前に予め準備された祭壇の両脇には、京の内の倉庫から運ばれてきた神の威厳を示す青磁牡丹唐草文大花瓶、明青花牡丹唐草文梅瓶を配し、中心には元青花八宝文大合子、青磁盤、明青花碗などに盛り付けられた供物が配膳されました。これらの供物の前には青銅製鼎形香炉や青磁の香炉を中心に置き、両脇には、タイ産褐釉大型壺に保管されていた「香花酒」が青磁の大型壺に移し替えられ、御嶽前に準備されました。

神事の準備を整えると、天神キミテズリの神を迎えるために佐司笠や高級神女達が「おもろ」を謡い、神が歌声を頼りに聖なる森（聖域）である京の内の首里森御嶽を目印として降臨しました。降臨したキミテズリの神への返礼として、供物や「香花酒」を入れた青磁馬上杯や元青花龍文高足杯を捧げて儀式が始まりました。国王即位の判断について神が乗り移った高級神女の一人が尚泰久へ託宣を伝え、無事に新琉球国王として即位することができました。新しい国王となった尚泰久は、神への御礼として青磁牡丹唐草文水注から馬上杯へ注ぎ、感謝の気持ちを込めて「香花酒」を捧げました。キミテズリの神は、新しい琉球国王の即位を大変お慶びになって天界へ戻っていきました。こうして琉球国王即位の儀式は無事に終わりました。

琉球国王となった尚泰久は、早速中国皇帝への琉球国中山王即位の封じを要請しました。中国皇帝は、冊封を行うために皇帝の使者である冊封使（冊封正使、副使が任命）を琉球へ派遣し、詔勅（内容：爾を封じて琉球国中山王と為す并に、爾及妃に文幣等の物を賜う・・・云々。）を行いました。これにより尚泰久は、正式に琉球国中山王尚泰久として名乗ることができました。また、この冊封を受けて初めて正式に中国および進貢国（朝鮮、タイ、ベトナムなど）との公式な交易ができたのです。

参考文献

- 1) 金城亀信ほか『首里城跡 一京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）—』沖縄県教育委員会 1998年
- 2) 金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」『重要文化財指定記念特別企画展 首里城京の内展—貿易陶磁からみた大交易時代—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

HP上ではご覧になれません

首里城京の内空間の変遷

- ①『首里城古絵図』（1703年～1707年頃）
- ②『首里城古地図』（1700年、1854年）
- ③『琉球建築』（1937年）
- ④『首里城熊本鎮台分遣隊配置図』（1893年）
- ⑤『貳百年前首里城鳥瞰図』

古絵図でみた京の内変遷と

発掘調査成果による京の内空間

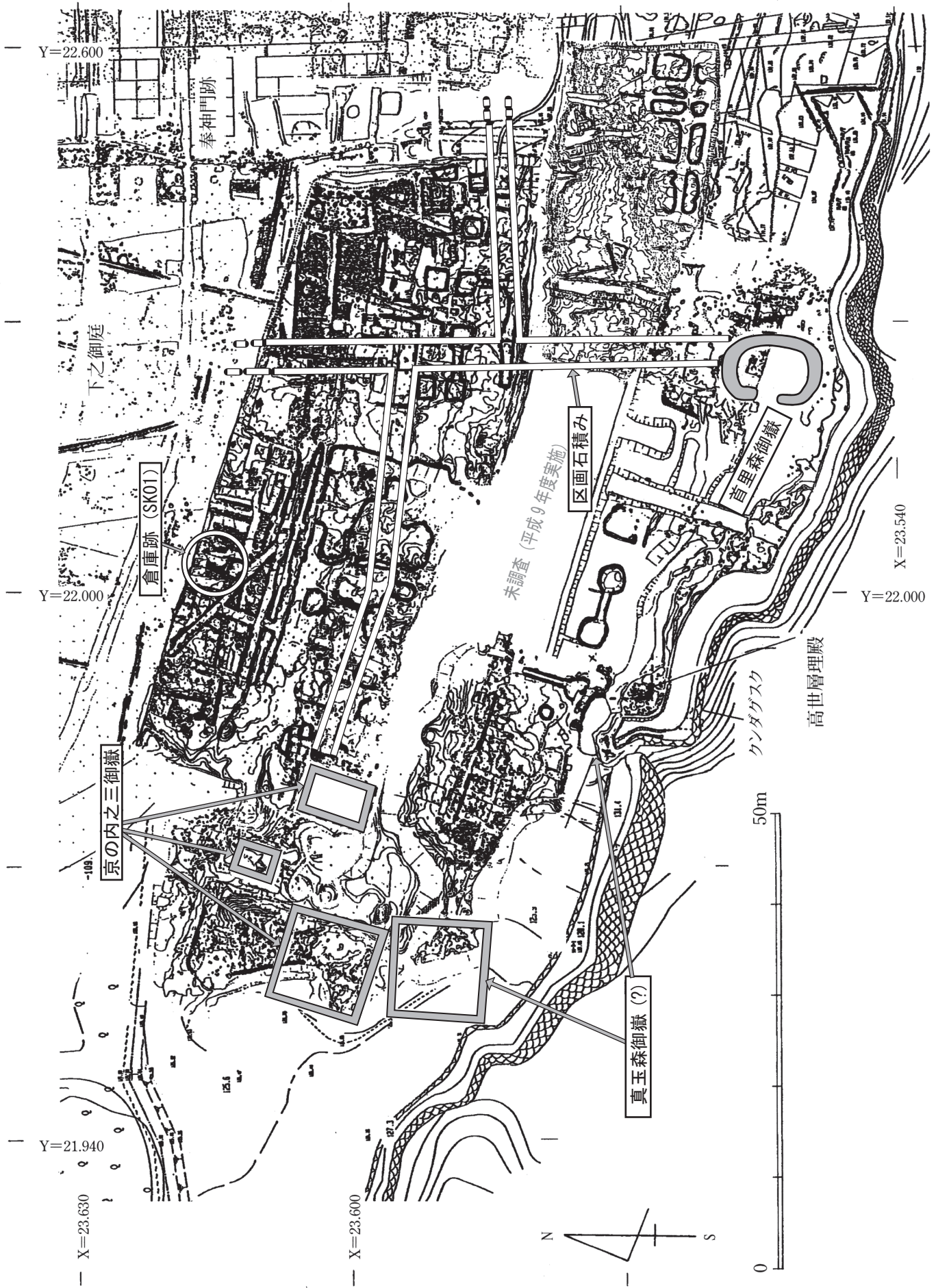
平成6～8年度に実施した京の内跡の発掘調査の際、事前に古絵図（①～⑤）を収集し、それを参考にしながら発掘調査を進めました。これらの古絵図の中の①『首里城古絵図』（1703～1707年頃製作）に描かれた樹木を消すと、⑥の古絵図になります。

⑥からは、京の内がA～Eまでの五つの空間で構成され、各空間を石積みで区画していることがわかります。その他、“首里森御嶽”や“京の内之三御嶽”が描かれていました。

実際の発掘調査では、14世紀中頃から昭和期に構築された石積み、石敷き、溝、石列、などの遺構が複雑に重なっていることが判りました。これらの遺構を整理して、京の内の空間は復元されています。

HP上ではご覧になれません

⑥『首里城古絵図』
（1703～1707年頃）に修正・加筆



京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間の復元案



首里城西のアザナ付近から
復元整備された京の内一帯を
西側より望む



京の内の御見跡から復元整備された
石門（アーチ門）を東側より望む



復元整備された首里森御嶽
(キミテズリの神が降臨したといわれている)

首里城下之御庭に復元整備された
御通しの首里森御嶽

(発掘調査の結果、下之御庭の首里森御嶽と京の内の首里森御嶽は相互に連結させるかのように石積みが二列途切れながら存在することが判明し、ここでは下之御庭の首里森御嶽を御通しとして取り扱った)





京の内に所在する半洞穴

(発掘調査の結果、木製扉の軸受けの^{ほぞあな}臍穴を開けた石材と入口用の切り石の他に床に磚瓦を敷き、洞穴壁に漆喰を塗布して白化粧をおこなっていることが判明した) 真玉森御嶽(真玉森グスク)と推察される



復元整備された“京の内之三御嶽”のひとつ



復元整備された“京の内之三御嶽”(左・右)

左：後方に奉神門、正殿、南殿を望む

2. 儀式用の祭具としてみた京の内の金属製品・ガラス玉

京の内倉庫跡からは、陶磁器以外に金属製品やガラス玉が一緒に出土しています。今回は、『おもしろさうし』（1531～1623年編纂、1710年再編纂）より、京の内でおこなわれた儀式で謡われた「おもしろ」から実際に使用されたとみられる祭具や、その可能性のある祭具（兜鉢、兜の三鍬形、刀の鐔、小札、鎖帷子、ガラス玉）を含めた当時の様子を伝える二首を取り上げました。この謡から京の内出土の金属製品やガラス玉がどのように使用されたか想像してみましよう。

第1巻「首里王府の御さうし」

あおりやへが節

5「一 聞得大君や赤の鎧 召しよわちへ 刀うちい 大国 鳴響みよわれ

又 鳴響む精高子が 月しろは さだけて 又 物知りは さだけて」

あおりやへが節

25「一 聞得大君ざや 初め軍 立ちよわちへ 合あて 行き遣り

敵 治あわちへ 又 鳴響む精高子が」

上記の謡にある「聞得大君」は、琉球王国の最高神（神女）のことですが、第一尚氏王統（1406～1469）の頃は佐司笠（さすかさ）にその地位や権力がありました。後に第二尚氏王統（1470～1879）になってから聞得大君（きこえおおぎみ）にその地位を譲ったものの、佐司笠の地位は依然として高かったようです。

そのような時代背景や、『明実録』にもとづく京の内倉庫跡の実年代が1459年であるということをもとに、この謡を第一尚氏王統の佐司笠が神事を執り行っていた時代と置き換えて、当時の様子を想像してみることができます。

番号5の「おもしろ」にみえる「赤の鎧」は、京の内倉庫跡出土の金属製品である鎧と関係する金物である「鎖帷子」、「小札」に相当します。また、「刀」に関しては、倉庫跡から「刀の鐔」が5枚出土していますが、刀身が一本も出土していないことから推定すると、実際の儀式に使用された刀の刀身は、竹光（註1）を代用したのかもしれない。また、番号25で謡われている「初め軍 立ちよ わちへ」では戦支度が想像され、頭には「三鍬形を取り付けた兜鉢」をかぶり、体には「鎧」を付けて、手もしくは腰に「刀」を差していたのかもしれない。

また、出土した「ガラス玉」は火災による熱で溶着したビーズの塊ですが、本来は儀式の際に神女が身につけた、ガラス製のビーズや勾玉の装飾品であり、儀式には欠くことのできない必需品でした。

参考文献

- 1) 金城亀信ほか『首里城跡 一京の内跡発掘調査報告書（I）』沖縄県教育委員会 1998年
- 2) 金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」『重要文化財特別企画展 首里城京の内展—貿易陶磁からみた大交易時代—』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

（註1）竹光 竹を削って刀身に代えたもの（『新明解国語辞典 第5版』三省堂 2001年）



青銅製鏡



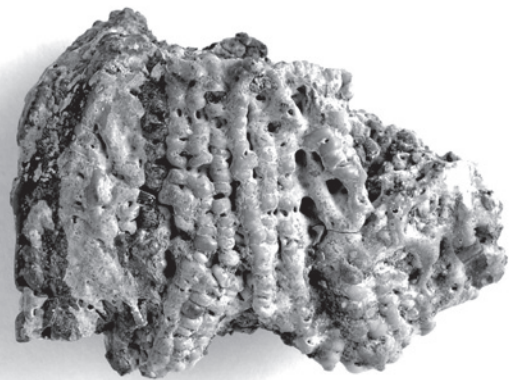
かなえがたこう る もって
鼎 形香炉の把手破片



香炉の口縁破片



香炉の胴部破片

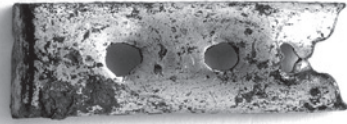


火熱を受けたガラス製のビーズの塊





と きん みつくわがただい
鍍金された三鍬形台



はっそうかなもの
鍍金された八双金物

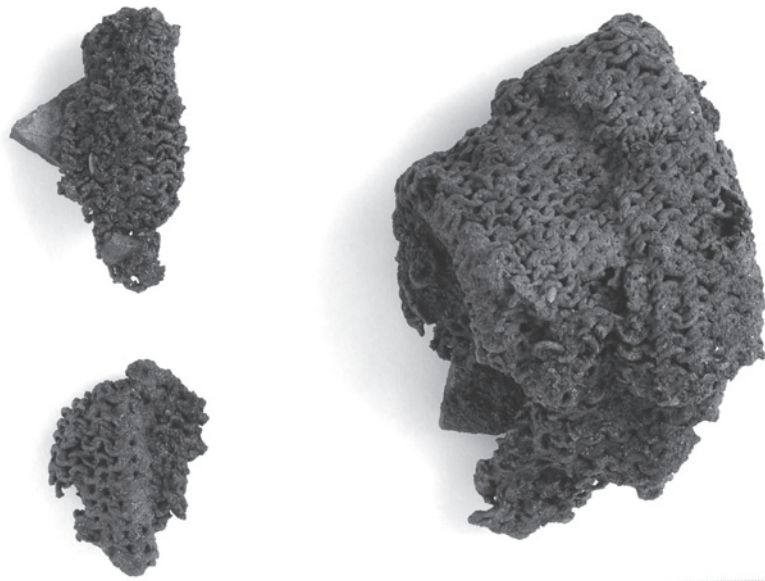


かぶと はち
兜 鉢



てつせい こぎね
鉄製小札





くさりかたびら
鉄製鎖帷子



つば
青銅製の刀の鐙

企画展 重要文化財『首里城京の内跡出土品展』スタッフ

- ★企画・編集 : 金城 亀信
- ☆原稿執筆 : 金城 亀信
- ★写真撮影 : 青山 奈緒・金城 亀信・矢舟章浩
- ☆デザイン : 金城 友香
- ★展 示 : 玉城 照美・仲間 留美・與古田 愛
・喜納ひとみ・仲宗根めぐみ

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

陶磁器から古の神事（祭祀・儀式）を考える
— 首里城京の内神事における陶磁器使用の在り方 —

発行年月日 平成 18 年（2006）1 月 17 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>



復元整備された首里城京の内

第 21 回文化講座

「グスクについてのはなし」

【日時】平成 18 年 1 月 21 日（土）午後 2 ～ 4 時

【場所】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

【講師】山本正昭（当センター専門員）

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

開所時間：午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

休 所：毎週月曜日、国民の祝日（子供の日、文化の日を除く）、

年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）

※祝日と月曜日が重なった時は、翌日の火曜日にも休所、その他、臨時（燻蒸）休所あり

交 通：◇沖縄自動車道西原 IC より 車で 7 分

◇市外線バスターミナル発 那覇バス 97 番「琉大附属病院前」下車 徒歩 1 分